

曇鸞の十念観

はじめに

曇鸞の著した『無量壽經優婆塞願生偈婆娑數契頭菩薩造並註』(以下『論註』)は、その題名が示しているように、世親の『無量壽經優婆塞願生偈』(以下『往生論』)を註釈したものである。『往生論』というのは、願生偈の最後に造論の意趣を現して、

我作論說偈 願見彌陀佛 普共諸衆生 往生安樂國⁽¹⁾
と説いているように、阿彌陀仏を見たてまつる功德により、諸々の衆生と共にその浄土に往生することを願って著されたものであり、さらに長行釈の末に、

菩薩如是修五念門行、自利利他速得成就阿耨多羅三藐三菩

提故。⁽²⁾

と説いていることから窺えるように、五念門という行を修すことによって自利利他二行を満足し、速やかに菩提を得ることを最終目的とするものである。五念門というのは、礼拝門・讚歎門・作願門・觀察門・回向門の五門であり、その中心となるのは、作願門・觀察門に説かれる奢摩他・毘婆舍那すなわち止観の双修という高度な瑜伽行である。この止観双修を中心とした五念門を修すことによって、自利利他二行を満足せんとするのであるから、『往生論』は大乗菩薩道の実践として説かれたものであるといえる。

しかし曇鸞は、『論註』の冒頭に龍樹の『十住毘婆沙論』易行品の所説を引用し、

易行道者、謂但以信佛因緣願生淨土、乘佛願力便得往生彼

梶 原 隆 淨

清淨土、佛力住持即入大乘正定之聚。正定即是阿毘跋致。譬如水路乘船則樂。此無量壽經優婆提舍、蓋上衍之極致不退之風航者也。⁽³⁾

と説いているように、『往生論』の所説こそ、仏の願力に乘じて往生・成仏することができる他力易行道を解き明かしたものであると解釈することにより、独自の浄土教観を展開することになる。曇鸞浄土教の根底にあるのは、阿弥陀仏の本願力を増上縁とするという思想である。すなわち『論註』下巻末に、

凡是生彼淨土及彼菩薩人天所起諸行、皆緣阿彌陀如來本願力故。何以言之。若非佛力四十八願便是徒設。今的取三願用證義意。願言。設我得佛、十方衆生至心信樂欲生我國乃至十念、若不得生者不取正覺。唯除五逆誹謗正法。緣佛願力故十念念佛便得往生。得往生故即免三界輪轉之事。無輪轉故所以得速一證也。願言。設我得佛、國中人不往正定聚必至滅度者不取正覺。緣佛願力故住正定聚。住正定聚故必至滅度無諸迴伏之難所以得速二證也。願言。設我得佛、他方佛土諸菩薩衆來生我國究竟必至一生補處。除其本願自在所化爲衆生故、被弘誓鎧積累德本、度脫一切遊諸佛國、修菩薩行供養十方諸佛如來、開化恒沙無量衆生使立無上正眞之道。超出常倫諸地之行、現前修習普賢之德。若不爾者不取正覺。緣佛願力故超出常倫諸地之行、現前修習普賢之

德。以超出常倫諸地行故所以得速三證也。以斯而推他力爲増上縁得不然乎。⁽⁴⁾

と説き、『無量壽經』の第十八願、第十一願、第二十二願を用いて、浄土往生および浄土における行は、みな阿弥陀仏の本願力に縁るものであり、他力を増上縁とするからこそ速やかに往生、住不退転、必至一生補處を得ることができるとするのである。従って、浄土に往生すれば必ず一生補處の位に到達できるのであるから、まず浄土に往生することが大切となるのである、そのための行として第十八願に誓われた十念が重要視されることになる。そしてまた、『往生論』においては止観双修の菩薩行として説かれていた五念門も、称名念佛を説く讚歎門を中心とした行へと変遷するのであるが、曇鸞の五念門積については別稿ですでに述べたので、本稿では、曇鸞の十念観について考察していくことにする。

一、十念往生者の機根

まず初めに、十念によって阿弥陀仏の浄土に往生を願う者の機根についてみていくことにする。『論註』上巻末には八つの問答が説かれているが、この八番問答の第一問答には、

問曰。天親菩薩回向章中言普共諸衆生往生安樂國、此指共

何等衆生耶。答曰。案王舍城所說無量壽經、佛告阿難、十方恒河沙諸佛如來皆共稱嘆無量壽佛威神功德不可思議。諸有衆生聞其名號、信心歡喜乃至一念至心回向願生彼國、即得往生住不退轉。唯除五逆誹謗正法。案此而言一切外凡夫人皆得往生。又如觀無量壽經有九品往生。下品生者、或有衆生作不善業五逆十惡具諸不善。如此愚人以惡業故墮墮惡道經歷多劫受苦無窮。如此愚人臨命終時遇善知識種種安慰為說妙法教令念佛。此人苦逼不遑念佛。善友告言、汝若不能念者應稱無量壽佛。如是至心令聲不絕具足十念稱南無無量壽佛。稱佛名故、於念念中除八十億劫生死之罪、命終之後見金蓮華猶如日輪住其人前。如一念頃即得往生極樂世界、於蓮華中滿十二大劫蓮華方開。觀世音大勢至以大悲音聲為其廣說諸法實相除滅罪法。聞已歡喜應時則發菩提之心。是名下品下生者。以此經證、明知。下品凡夫但令不誹謗正法信佛因緣皆得往生⁽⁶⁾。

と説かれており、前述した『往生論』の造論意趣偈に説かれる「諸衆生」が、いかなる衆生を対象としたものであるのかを解釈している。このなかで曇鸞は、『無量壽經』と『觀無量壽經』の兩經の所説を引用し、「諸衆生」とは、『無量壽經』に説かれる「諸有衆生」すなわち一切の外凡夫人であるとし、また『觀無量壽經』に説かれる下品下生の凡夫であるとする。曇鸞は、

『無量壽經』に説かれる諸有衆生も、『觀無量壽經』に説かれる下品下生者と同じく凡夫であると捉え、十念往生の機根であると解釈する。『往生論』においては、五念門を修す行者は、若善男子善女人、修五念門行成就、畢竟得生安樂國土見彼阿彌陀佛⁽⁷⁾。

と説かれているように、「善男子善女人」という語で表され、五念門を解釈して後は、

如是菩薩、奢摩他毘婆舍那廣略修行成就柔軟心、如實知廣略諸法。如是成就巧方便迴向⁽⁸⁾。

と説かれているように「菩薩」という語で表されている。従って、行者の機根は善男子善女人であり、その善男子善女人が自利利他二行を兼ね備えた五念門を修すことによって菩薩と呼ばれるようになり、「諸衆生」と共に淨土往生を願うのであるから、『往生論』においては、「諸衆生」とは回向を受ける立場のものと考えられる。しかし曇鸞は、この「諸衆生」は五濁の世・無仏の時を生きる凡夫であり、その凡夫こそ往生者の機根であると解釈し、たとえ五逆十惡をなす凡夫であっても、十念を修せば罪が減して往生できるとするのである。

このように曇鸞は、『往生論』においては回向を受ける側とされていた、「諸衆生」すなわち下品下生の凡夫こそ淨土往生者の機根であると捉え、その往生行として十念を説くに至るの

である。それでは次に、その十念についてみていくことにする。

二、八番問答に説かれる十念

曇鸞は、たとえ五逆十惡をなす凡夫であっても、十念を修せば淨土に往生することができると説くのであるが、なぜ五逆十惡の者でも十念によって往生することができるのかについて、八番問答の第六問答には次のように説かれている。

答曰。汝謂五逆十惡繫業等爲重、以下下品人十念爲輕、應爲罪所牽先墮地獄繫在三界者、今當以義按量輕重之義。在心在緣在決定、不在時節久近多少也。云何在心。彼造罪人自依止虛妄顛倒見生、此十念者依善知識方便安慰聞實相法生。一實一虛、豈得相比。譬如千歲闇室光若暫至即便明朗。豈得言闇在室千歲而不去耶。是名在心。云何在緣。彼造罪人自依止妄想心、依煩惱虛妄果報衆生、此十念者依止無上信心、依阿彌陀如來方便莊嚴眞實清淨無量功德名號生。譬如有人被毒箭所中截筋破骨、聞滅除藥鼓即箭出毒除。豈可得言彼箭深毒厲聞鼓音聲不能拔箭去毒耶。是名在緣。云何在決定。彼造罪人依止有後心有間心生、此十念者依止無後心無間心生。是名決定。按量三義、十念者重。重

者先牽能出三有。兩經一義¹⁰耳。

これは、五逆十惡による諸々の惡業と十念を秤にかければ、惡業が重いはずであり、また多劫にわたる惡業とわずか十念の善業では、当然惡業が勝るはずではないかという設問に対して答えたものである。この問に対し曇鸞は、業の輕重というのは心・緣・決定によって比較すべきものであり、時間の長短によるものではないとする。すなわち五逆と十惡を比較してみると、心においては「虛妄顛倒見」と「聞實相法」という虚と実との比較、緣においては「煩惱虛妄果報衆生」と「阿彌陀如來方便莊嚴眞實清淨無量功德名號」という煩惱具足の凡夫と如來の無量功德名号との比較、決定においては「有後心有間心」と「無後心無間心」という不決定と決定との比較であるから、いずれにおいても比較にならないほど十念の方が勝っていることになる。従って、淨土往生の教えを聞き、無上の信心をもって阿彌陀仏の無量功德の名号を緣とし、他念を雜えず一心に十念すれば、五逆十惡の凡夫であっても、命終の後に淨土に往生することができるのである。しかし、これは観点を変えれば、信心が定まらず雜念をもって念仏したのでは十念を修したことにはならず、往生することもできないということである。

それでは、十念とは一体どのようなものであるか。その点について、第七問答には、

問曰。幾時名爲一念。答曰百一生滅名一刹那、六十刹那名爲一念。此中云念者不取此時節也。但言憶念阿彌陀佛。若總相若別相、隨所觀緣心無他想十念相續名爲十念。但稱名號亦復如是。

と説いている。すなわち十念の念とは時間を指す語ではなく、阿彌陀仏の総相別相を憶念することであり、他想を雑えず念々相続することを十念といい、これは称名の場合も同様の義であるとするのである。またその十という数に關しては、『論註』八番問答の第八問答に、

問曰、心若他緣攝之令還可知念之多少。但知多少復非無間。若癡心妄想復依何可得記念之多少。答曰、經言十念者明業事成辦耳。不必須知頭數也。如言蠅蚘不識春秋。伊蟲豈知朱陽之節乎。知者言之耳。十念業成者是亦通神者言之耳。但積念相續不緣他事便罷。復何暇須知念之頭數也。若必須知亦有方便。必須口授不得題之筆點。

と説いており、十念によつて往生できるというのは仏側から言うことであるから、念仏を修す側は數に捕われることなく、念を相続することが必要であるとしている。つまり數に捕われれば、それが他縁を雜えることになるから、數などに捕われずただ一心に念を相続すれば、自然に往生の業を成ずることができるとするのである。

以上のように曇鸞は、十念は十という數に意義があるのではなく、決定の信心をもつて念々相続するところにその意義があるとするのであり、臨命終時という僅かな時間しか残されていない凡夫が、そのすべてを費やして念を相続すれば、自ずと十念が達成できると理解していたといえる。しかし、前述した第七問答を振り返ってみると、他想を交えず阿彌陀仏の総相別相を憶念することが十念であるとした一方、ただ名号を称える場合も同様であるとして、憶念と称名との二義を出している。また、第一問答の下品下生の記述によれば、称名は臨終に苦に迫られて念仏することが出来ない者を対象として説かれているようにも見受けられる。この憶念と称名の關係はどの様に理解すればよいのであろうか。次に憶念と称名についてみていくことにする。

三、憶念と称名

まず、仏の総相別相を憶念するとはどのようなものであるのかをみてみることにする。『論註』上巻の仏莊嚴第二、身業功德成就釈をみてみると、『觀無量壽經』第八像想觀の文を引用して、

言諸佛如來是法界身者、法界是衆生心法也。以心能生世間

出世間一切諸法故、名心為法界。法界能生諸如來相好身亦如色等能生眼識。是故佛身名法界身。是身不行他緣。是故入一切衆生心想中。心想佛時是心即是三十二相八十隨形好者、當衆生心想佛時佛身相好顯現衆生心中也。譬如水清則色像現、水之與像不一不異。⁽¹³⁾

と説かれてゐる。すなわち仏身というのは衆生の心を縁とするものであるから、衆生が仏に想いを寄せれば、水に映る色像のごとく、仏身相好は衆生の心中に顯現するものと解釈するのである。これは觀察門の解釈中に説かれるものであるが、仏の相好に想いを寄せるという点においては憶念も同様の義であると考へられる。従つて、衆生が仏の総相別相を憶念すれば、その衆生の想念に應じて、仏が他力によつてその姿を顯現するのであり、心に全く他縁を雜えなければ、衆生の心中は仏の相好で満たされることになる。すなわち、その状態が曇鸞の説く憶念であると考えられる。また、『略論安樂淨土義』（以下『略論』）に説かれる十念の解釈を見てみると、

問曰。下輩生中云十念相續便得往生。云何名為十念相續。
答曰譬如有人空曠迴處值遇怨賊、拔刃奮勇直來欲殺、其人勁走視渡一河。若得渡河首領可全。爾時但念渡河方便。我至河岸爲著衣渡爲脫衣渡。若著衣納恐不得過。若脫衣納恐無得暇。但有此念更無他緣一念何當渡河。即是一念。如是

不雜心名為十念相續。行者亦爾。念阿彌陀佛如彼念渡逕于十念。若念佛名字、若念佛相好、若念佛光明、若念佛神力、若念佛功德、若念佛智慧、若念佛本願、無他心間雜心。心相次乃至十念名為十念相續。⁽¹⁴⁾

と説かれてゐる。例えば賊に襲われそうになり、逃げ走る面前に河が現れた場合、賊から逃れるために無心に河を渡る方法を考へるが、それと同様に心に他念を雜えず、一心に淨土往生を願ひ、阿彌陀仏の名字・相好・光明・神力・功德・智慧・本願を念することが一念であり、さらに他心を雜えずその念を相續することが十念であるとするのである。この文によれば、他念を雜えず念々相續することを十念とする点は『論註』八番問答の記述と同一であるが、憶念の対象については、阿彌陀仏の総相別相という相好のみでなく、名字・光明等様々な対象が出されている。従つて憶念というのは、仏の姿を念することだけをいうのではなく、仏の番号や様々な功德を念することと同じく憶念というと考えられる。今、『論註』下巻に説かれる五念門の解釈中、作願門・觀察門の解釈をみてみると、作願門に奢摩他を解して、

奢摩他云止者、今有三義。一者一心專念阿彌陀如來、願生彼土、此如來名號及彼國土名號、能止一切惡。⁽¹⁵⁾
と説き、さらに觀察門に毘婆舍那を解して、

毘婆舍那云觀者、亦有二義。一者在此作想觀彼三種莊嚴功德、此功德如實故修行者亦得如實功德。如實功德者決定得生彼土。¹⁶⁾

と説いている。この両者は、此土における奢摩他・毘婆舍那とその功德を現すものであるが、奢摩他に説かれる一心に阿弥陀仏を念じ往生を願うというのは、まさに憶念を指すものである。毘婆舍那に説かれる此土において想を作し浄土の三種莊嚴を觀ずるというのも、憶念の対象に仏の功德・本願が挙げられ、浄土の三種莊嚴が願心をもって莊嚴されたものであること、前述の像想觀に想念に應じて衆生の心中に相好が顯現すると説かれていることと併せて考えれば、また憶念によって達成できるものであるといえる。

このように、曇鸞の説く憶念とは、此土における奢摩他・毘婆舍那をもその範疇に収めたものと解釈できるから、憶念を修せば名号による止惡、浄土往生という功德も得られるということになる。また、『略論』には続けて、

一往言十念相續、似若不難。然凡夫心猶野馬識劇猿猴、馳騁六塵不暫停息。宜至信心預自慰念便積習成性善根堅固也。如佛告頻婆娑羅王、人積善行死無惡念。如樹西傾必倒隨曲。若便刀風一至百苦湊身。若習前不在懷念何可辯。又宜同志五三共結言要垂命終時、迭相開曉爲稱阿彌陀佛名號

願生安樂、聲聲相次使成十念也。譬如蠟印印泥印壞文成。此命斷時即是生安樂時。一入正定聚更何所憂也。¹⁷⁾

と説かれており、十念相続と言えば簡単に聞こえるが、凡夫の心は散り乱れるものであるから、日頃からの積み重ねが大切であるとし、また臨終には、仲間と約束して仏名を称して十念を成ずることを勧めている。すなわち、十念という義によれば、憶念も臨終まで相続することが必要であるが、凡夫の心は散乱しやすいものであり、臨終に十念を達成することは困難であるから、平生から念仏を積み重ねておくべきであり、さらに臨終の際には、仲間の助けをもって称名を修し十念相続する旨を明かすのである。これは曇鸞がいかに臨終までの念相続を重要視していたかを示すものであると同時に、他縁を雜えては憶念を修すことはできないので、散乱の心においては称名を修すべきことを示すものと考えられる。また憶念において注目すべき点は、『略論』に様々な憶念の対象が挙げられている中、その初めに仏名字と説かれていることである。これは奢摩他の解釈からも窺えるように、曇鸞が名号の功德を重要視していたことを現すものといえるが、仏の名字を念ずるということは、仏の名号を称える称名と密接に関係するものと考えられるので、この名号の功德という点に着目しながら、次に称名についてみていくことにする。

称名の功德については、『論註』下巻の起観生信中、讚嘆門
釈に、

稱彼如來名者、謂稱無礙光如來名也。如彼如來光明智相
者、佛光明是智慧相也。此光明照十方世界無有障礙。能除
十方衆生無明黑闇。非如日月珠光但破空穴中闇也。如彼名
義欲如實修行相應者、彼無礙光如來名號能破衆生一切無
明、能滿衆生一切志願。然有稱名憶念而無明由在不滿所
願者何者。由不如實修行與名義不相應故也。云何爲不如實
修行與名義不相應。謂不知如來是實相身是爲物身。又有三
種不相應。一者信心不淳若存若亡故。二者信心不一無決定
故。三者信心不相續餘念間故。此三句展轉相成。以信心不
淳故無決定、無決定故念不相續。亦可念不相續故不得決定
信、不得決定信故心不淳。與此相違名如實修行相應。是故
論主建言我一心⁽¹⁸⁾。

と説かれている。すなわち、阿弥陀仏の名号には破闇満願の功
徳があるから、称名によって光照を蒙れば、一切の無明を破し
一切の志願を満たすことができるというのである。しかし破闇
満願の功德を得るためには、如実に修行して名義と相応するこ
とが必要であるとされ、そのためには「如來是實相身爲物身」
すなわち阿弥陀仏は智慧と慈悲が円満した仏であり、その名号
を称えることがそのまま光照を蒙ることであるという義を理解

していなければならないとされている。そしてさらに三種の不
相応として、信心不淳・信心不一・信心不相続が説かれてい
る。これは、信心が薄ければ決定せず、決定がなければ相続も
ない。また信心が相続しないから決定せず、いつまでたっても
信心が薄いままであるということであり、如実修行相応のため
には、信心淳く、信心決定し、信心相続することが必要であ
り、いずれが欠けてもいけないとされている。つまり仏の名号
には、仏の智慧と慈悲すなわち内証と外用の功德すべてが納め
られているから、仏の名号を称えれば無量の功德を蒙ることが
できると信じ、その信心を相続して称名を修せば、破闇満願の
功德が得られるのであるから、まず名号の功德を信じることに
大切なのである。この名号の功德について、讚嘆門釈には次の
様な問答をもって説明している。

問曰。名爲法指。如指指月。若稱佛名號便得滿願者、指月
之指應能破闇。若指月之指不能破闇、稱佛名號亦何能滿願
耶。答曰。諸法萬差。不可一概。有名即法、有名異法。名
即法者、諸佛菩薩名號般若波羅蜜及陀羅尼章句、禁咒音辭
等是也。如禁誦辭云日出東方乍赤乍黃等句、假使西亥行禁
不關日出而腫得差。亦如行師對陳但一切齒中誦臨兵闔者皆
陳列在前行。誦此九字五兵之所不中。抱朴子謂之要道者
也。又苦轉筋者、以木瓜對火熨之則愈。復有人但呼木瓜名

亦愈。吾身得其効也。如斯近事世間共知。況不可思議境界者乎。滅除樂塗鼓之喻復是一事。此喻已彰於前故不重引。

有名異法者如指指月等名也。¹⁹⁾

すなわち、諸法には名即法と名異法があるが、諸仏菩薩の名号、般若波羅蜜、陀羅尼章句、禁咒音辭等は名の法に即するものであり、世間で行われている禁咒音辭ですら功德があるのだから、不可思議の境界である仏名号については無量の功德があつて当然であるというのである。つまり名号の功德というのは不可思議の境界であり、凡夫の思慮の及ぶ範囲ではないから、ただ仏名号には無量の功德があると信じることが大切であり、それによって信心が淳くなり、信心が決定し相續するのである。

このように称名は、単に散乱の心を静めるための手段ではなく、名号そのものに無量の功德があるのだから、その名号を称えることこそ無量の功德を蒙る手段であり、浄土往生のための行であるといえる。そして、ここに説かれる信心の決定と相續は、すなわち十念に説かれる決定の信と念の相續であると考えられるから、臨終における称名にも、当然破闇満願の功德があるといふことができる。また、名号には無量の功德があるのだから、仏の名字を憶念する場合も、当然称名と同様の功德があると考えらる。従つて仏の名字を憶念すれば、仏の様々な功

徳、すなわち仏の相好さらには浄土の三種莊嚴を憶念する功德も得られるのであり、惡を止め浄土往生を得るといふ奢摩他・毘婆舍那の功德も得ることができるのである。しかし、凡夫の心は散乱しやすく、憶念を相續することは困難であるから、まず称名を修し、声々相い繼いで行く中で心に名号を持し、それが憶念さらには奢摩他・毘婆舍那へと繋がって行くものと考えられる。従つて散乱心の凡夫は、まず称名を修すべきであるといえる。

結 び

曇鸞は、五濁の世・無仏の時に生きる凡夫こそ阿弥陀仏の浄土に往生する機根であると捉え、本願力を増上縁とする他力易行道として十念を説く。曇鸞の説く十念とは、臨命終時の凡夫が、信心を決定して、残された僅かな時間に他心を雑えず念々相續することであるが、それには憶念と称名の二義が出されてゐた。その中、憶念というのは、一心に仏の名字・相好・光明等を念じることであり、此土における奢摩他・毘婆舍那をも含むものであるから、これは往生行であると同時に、浄土往生を契機として大乘菩薩道へと発展する行であるといえる。しかし、凡夫の心は散乱しやすいものであり、ましてや臨終の苦に

苛まれている時には、憶念を相続することは困難であるから、散乱の心でも修すことが可能な称名を説くのである。この称名というのは、無量の功德のある仏名号を称えるものであるから、臨命終時の凡夫にも修すことのできる行であり、まさに万人が修すことのできる行であるといえる。曇鸞の十念観の特色は、この名号の功德を説く点にある。すなわち仏名には、その仏のすべての功德が込められており、仏名を称すれば仏の無量の功德を蒙ることができるのであるから、称名によって必ず淨土に往生できるとするのである。この名号の功德は、讃嘆門釈に説かれるものであるが、作願門釈の奢摩他においても名号の功德が説かれている点から窺えるように、称名のみでなく憶念においても同様の功德が得られるものと考えられる。従って仏名を憶念すれば、仏の相好・光明等のあらゆる功德を憶念することができるのであり、それによって此土における奢摩他・毘婆舍那も修すことができるということになる。そしてこの仏名の憶念は、称名を修す中に自然と達成できるものと考えられるから、口に仏名を称え、心に仏名を憶念すれば、五念門の中の讃嘆門、作願門、観察門は自然と成就することができ、淨土に往生した後、大乘菩薩道としての五念門を修すことができるのである。このように、曇鸞の説く十念は、臨命終時の苦に苛まれた凡夫であっても、ただ仏名を称することによって淨土に往

生し、さらには五念門という大乘菩薩道を成就せんとするものであるから、これはまさに他力易行道を説き明かしたものであるといえよう。

註

- (1) 『淨土宗全書』(以下『淨全』) 一卷、一九三頁
- (2) 『淨全』 一卷、一九八頁
- (3) 『淨全』 一卷、二一九頁上
- (4) 『淨全』 一卷、二五五頁上、二五六頁上
- (5) 拙稿「曇鸞の往生観考」(『佛教大学大学院研究紀要』第二号、平成五)
- (6) 『淨全』 一卷、二三四頁下、二三五頁下
- (7) 『淨全』 一卷、一九三頁
- (8) 『淨全』 一卷、一九六頁、一九七頁
- (9) 五念門の行者については、工藤成性氏は、『世親教學の體系的的研究』(一九五五、永田文昌堂) 二八三頁、二八七頁において、「淨土論」は凡て菩薩の修行を明かしたものとされ、また幡谷明氏は、『曇鸞教學の研究』(一九八九、同朋舎) 九二頁において、善男子善女人とされているのは、大乘菩薩の問題が、実は善男子善女人の問題であることを明らかにするものとされ、藤堂恭俊氏は、『淨土仏教の思想』四「曇鸞」(一九九五、講談社) 一三六頁において、別時意趣と極印の押された「願見」「願生」「称念」を実践している在俗の仏教信者を対象として創設されたのが瑜伽行の具体的実践としての五念門行であったのではないかとされている。

- (10) 『浄全』一巻、二三六頁上〜下
- (11) 『浄全』一巻、二三六頁下〜二三七頁上
- (12) 『浄全』一巻、二三七頁上
- (13) 『浄全』一巻、二三一頁上
- (14) 『浄全』一巻、六七一頁下〜六七二頁上
- (15) 『浄全』一巻、二三九頁上
- (16) 『浄全』一巻、二三九頁下
- (17) 『浄全』一巻、六七二頁上〜下
- (18) 『浄全』一巻、二三八頁上〜下
- (19) 『浄全』一巻、二三八頁下〜二三九頁上

〔注記〕 本稿は、拙稿「曇鸞の往生観考」(前述)から派生したともいべきもので、取り扱った資料の一部が同じであることをお断りしておく。